

ブリ類のべこ病に有効な治療法を開発

近年、ブリ、カンパチなどのブリ

類の養殖種苗で、ミクロスポリジウム属の微胞子虫 (*Microsporidium seriolae*) の感染によるべこ病が多発しています。これにかかると死亡したり、成長が悪くなったりするほか、出荷サイズの魚にも胞子(写真1)が入ったシストと呼ばれる硬い膜でおおわれた袋や、そこから胞子が排出されて空になった硬い膜が筋肉中に残って商品価値がなくなるなど、大きな経済的被害が発生します(写真2)。

そこで、水産研究・教育機構は、近畿大学水産研究所、愛媛県農林水産研究所水産研究センター、鹿児島県水産技術開発センターと共同で治療法の開発に取り組みました。その結果、べこ病の原因虫の筋肉中での増殖抑制やシスト形成の阻止には、フェバンテルなどのベンズイミダゾール系薬剤の経口投与が有効であ

ることを明らかにしました。

また、いったんシストが形成されると、投薬してもシストが残ることから、早期に診断してシストが形成される前に投薬することが重要であることを明らかにしました。本成果により治療法が実用化されれば、本病による被害の軽減に大きく貢献することが期待されます。



筋肉中のシストの形成およびシスト内の胞子の排出により体表に凹凸が見られます



筋肉中のシスト(胞子が入った乳白色のシスト(→)が多数認められます)

写真2 べこ病にかかった魚

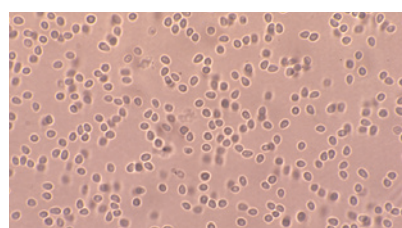


写真1 原因虫の胞子

大きさは約3マイクロメートル

べこ病

ブリ類の幼稚魚を養殖し始めて間もない5月下旬頃から7月頃にかけて発生する病気で、体表がくぼんで凹凸が見られることが名前の由来です。くぼんだところを調べると、その筋肉内に白色の凝固した牛乳色の粒のかたまりがあり、その周辺の筋肉組織が融解しているのが観察されます。

※この成果は 農林水産省の水産防疫対策委託事業によるものです。